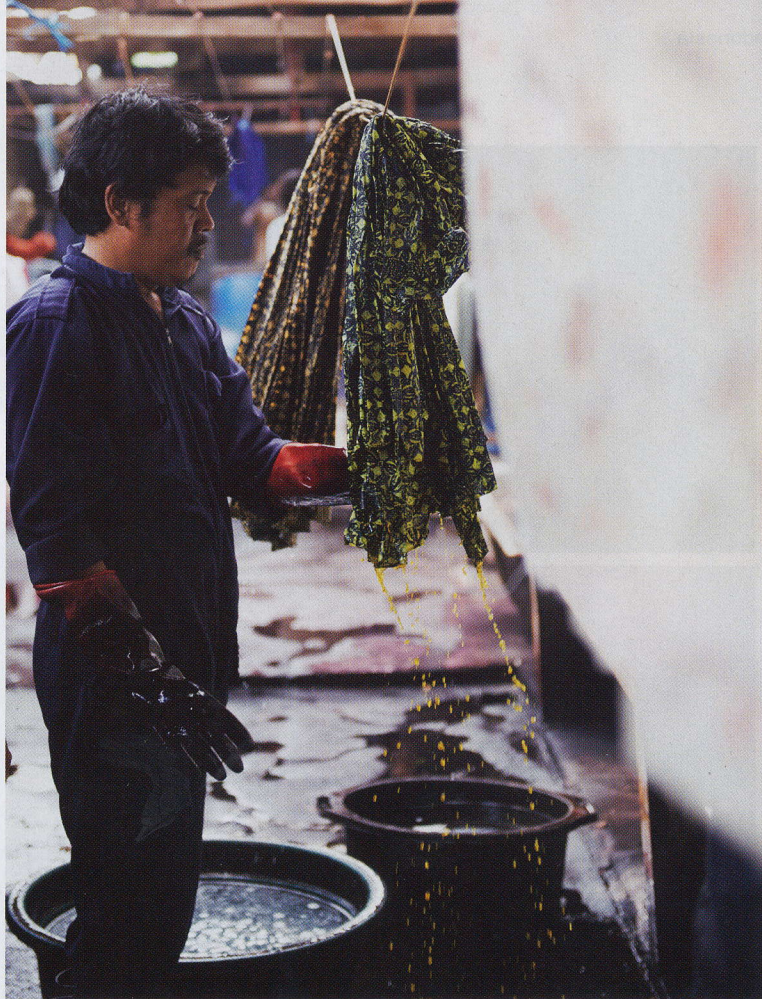


ジャワ島のバティックを代表する色調は、ソガと呼ばれる樹皮染料の茶色と、藍染の紺色。この二つの染料は、南国の強烈な陽光を浴びても色褪せないという特性を持つため、有史以来永年愛用されてきました。いまは原料の調達が困難になりつつあること、また化学染料の質が飛躍的に進歩し天然物に遜色がないことから、化学染料を使用する場合がほとんど。そのため色彩のレパートリーが広がり、時代に添った新しい魅力が演出できるようになりました。「ビンハウス」では基本的な伝統色を正確に守るため、特別な色調合を定めています。とはいえ、日々の気温や湿度の上下、日光の射し具合などで微妙に色合いが変化し、それもまた浸し染めの妙味となります。



古いコレクションから。左は禁制紋様の代表格、バラム。王宮内では今でもこの禁制ルールが厳格に守られているそう。右はその巧緻な描写に息を呑む、反転技を使った模様。



着色した布を水切りしているところ。この後、冷水で色止めをしてから、熱湯が煮えたぎるドラム缶に漬けて口ウを落とし、乾かす、という作業を繰り返します。

伝統に時の洗練を加え、未来へと伝えていく。

コマラさんとバティックの出会いは、1970年代のこと。アンティーク布のコレクターだった前夫が集めた布を干している際、突如そこにある「魂」に気付き、心射抜かれたと言います。その後約10年を経て、その美しさが失われつつあることに危機感を抱き「ビンハウス」を立ち上げる訳ですが、インドネシア各地で集めたというアンティーク・コレクションは、いずれも素晴らしく興味深いものばかりでした。例えば、写真上段左のシャープな斜めの縞模様「バラム」。短剣を图案化したこの柄は、王権の象徴として高い能力を意味し、かつては王族でも高位の人々しか着用が許されなかった「禁制紋様」でした。この制度が解かれたのは、インドネシアがオランダから独立を果たした1945年直後のこと。当時のスカルノ大統領が、地域や身分の分け隔てなく国民が平等に着られる「バティック・インドネシア」を提唱し、禁制紋様は一転して自由のシンボルへと変わったのです。現在も人々に愛され続けるこの柄は、そんな歴史背景を表しています。また、抜きん出た技術力を見せつけるのは、右側の「ネガティブ・バティック」という手法の一枚。繰り返しになりますが、ろうけつ染めは染めない箇所にロウを置くやり方。と踏まえて再度写真をみると、この柄の面白さにお気付きになるでしょう。線画に見せ掛けた青い花は、白地部分にロウを置くことで表現しているのです。この驚くべき反転に加え、ロウに針穴を開けた無数の点描が、精度をさらに押し上げています。細緻を極めた手仕事の裏側にあるのは、創造への情熱、奥深い知性、そしてニヤリと微笑んでいるような遊び心。

知る由もない作り手の感性そのものが布を介してはきりと伝わり、一瞬ゾクとするような興奮を覚えめました。昔ながらの手法を忠実に守りながら、リズム感溢れる柄の置き方、取り合わせ、巧みな配色をもつて伝統を組み換えて洗練させ、未来へと受け継いでいく「ビンハウス」のバティック。半年ごとに展開するDAMACASAには商品提供が到底間に合わず、また「量産ならばプリントの方がいいのでは」と一度は断られたものの、たとえ時間が掛かってもご紹介する意義と使命を感じた今回の商品。手仕事の価値ある美しさがここにあります。



1) オーナー、ジョセフィーヌ・W.コマラさん。「ビン」は幼少時のニックネームから。 2) バリ島の高級エリア、スミニャックにある「ビンハウス」のショップ。ストールやバティック衣料に加え、小物、ヴァンテージ布も充実。